『正信偈』に親しむ ⑪

【本文・読み方】

顕示難行陸路苦
難行の陸路、苦しきことを顕示して

信楽易行水道楽
易行の水道、楽しきことを信楽せしむ。

憶念弥陀仏本願
弥陀の本願を憶念すれば

自然即時入必定
自然に即の時、必定にいる。

唯能常称如来号
ただよく、常に如来の号を

応報大悲弘誓恩
大悲弘誓の恩を報ずべし、

凡夫がすくわれる道　（竜樹菩薩）

【現代語訳】

竜樹菩薩は、さとりへの道は二つあると示されます。まず陸路を歩く苦しい難行です。

いまひとつは、船に乗って楽々と川を渡るような行易い道があると示されました。仏の願いであるお念仏の船に身をまかせれば、必ず悩みの海を渡りきり、悟りの岸にいたると教えられたのです。

大事なことは、この仏の願いを忘れず心に思い念ずれば、ただちに仏のはたらきによって、必ず仏となると約束された身になるのです。

このように、願力自然の力で仏になることに定まった上は、ただ仏のみ名を称えて、どこまでも広い悲願の恩恵にこたえていくことが大切です。

仏教を難行道と易行道に分けられたのは、竜樹菩薩の大きな功績です。これがやがて曇鸞大師、道綽禅師を経て、法然上人が浄土教を開かれる源となったのです。難行道は、きびしい修行を長年つまねばならず、凡夫には耐えられないもの。それに対し、易行道であるお念仏は、船に乗ってさえおれば楽々と目的地に着くことができるのです。つまり、易行であるお念仏は、凡夫をすくうために選びとられた道なのです。

《本願を信じる》

真宗の教えは、南無阿弥陀仏のお念仏を称えるだけですくわれるといいますが、具体的にはどうすればいいでしょう。結論から言えば、「信じる」という気持ちで静かに聞きたずねていくことです。

如来の本願は、悩み深き凡夫をかならずすくうと誓われます。如来（仏）から回向された信心ですから、人間の信心のように不純な気持ちが混じらないこころないのです。私たちが特別な行をする必要がないのです。あるがままの事実を受け入れていく智慧の眼をさずかるのです。

《聞くことは易しい》

親鸞聖人は、信心は「如来の本願の意味を聞くこと」であると教えられます。また、「本願を信ずることはむずかしいことではなく、聞くほかはない」とも教えられます。ただ、大切なことは、如来の本願を人間のはからいをまじえないで聞くことなのです。

《聞くことこそが信心》

親鸞聖人は、「聞光力（如来の光明を聞く）」ということばを大切にされます。対象のものごとをただぼんやり見ているのではない。対象のものごとから、こちらにはたらきかけてくるものがあるのです。如来の本願が、智慧の光となってあなたに至り届くのです。南無阿弥陀仏（お念仏）のこころを聞かせてもらうのです。人間のはからいがまじわらない心で聞かせてもらうことが、私たち凡夫がすくわれる道だと教えられるのです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

身近な出来事

バイクでお参りの道中、目的のお宅手前の踏切が開かない。突然、踏切の向こう側のバーを無理やり持ち上げ、線路をわたる男性が目に入った…先日、大きな事故があったばかり、あ然として見ていたが、結局、私もしびれをきらし、回り道をして目的地に着いた。もし、私が法衣を着ていなかったら、誰も見ていなかったら…と思うと怖くなった。縁しだいで、何をするかわからない身を生きていることに気づかされた光景だった。

（y）